

25. 大津市滋賀里 大通寺古墳群調査概要(1)



位置図

古墳群の位置

大通寺古墳群は、大津市滋賀里二丁目より字家田、大谷にかけて存在する古墳時代後期の群集墳である。大津市北郊の諸丘陵南斜面には、ことごとく群集墳が築造されている。南より福王子古墳群、池の内古墳群、百穴古墳群等があり、大通寺古墳群は、古墳地帯の中央部百穴、大谷両古墳群にはさまれて存在している標高170m前後、琵琶湖よりの比高100m足らずの高所に築造されている。

古墳群の構成

大通寺古墳群は、その中心部が疏水工事、琵琶湖の護岸工事等で石室石材が抜かれ、また40～50年来の竹藪造成のため、旧地表面は著しく削平をうけ、大多数の古墳がすでに破壊消滅していた。古墳群の上端・下端のみがようやく破壊をまぬがれており、現在確認できる古墳数は20数基である。その密度から復元すれば50数基を上回る群集墳であったと考えられる。

第1号古墳の調査

位置 第1号古墳は、大通寺古墳群中高位に位置し、

東方に第3号古墳が存在している。今回発掘調査の対象となった古墳中もっとも上位にある。

墳丘 調査以前の墳丘は、抜石・削土等で著しく破壊され、墳丘らしきものは全く認められず、巨石が散乱する状況であった。発掘調査の結果、地山層以下までに削土が及び、墳丘盛土はまったく残存せず、当古墳の規模を明らかにすることは出来なかった。埴輪、葺石等の外部施設はなかったものと考えられる。

石室 本古墳の内部主体は、散乱する巨石や被掘坑等より、第3号、第5号古墳と同様、横穴式石室と考えられた。前記の如く、地山以下に及ぶ削土のため石室もまた全壊しており、現在はその形骸をとどめるのみであり、石室の構造規模等は不明である。

遺物 第1号古墳にかかる遺物は、まったくこれを認めることが出来なかった。

小結 第1号古墳は全壊しており、その平面形すら確認できなかったが、村人の話や巨石の散乱状態からここに古墳が存在したことは間違いないものとなった。

第2号古墳の調査

位置 第2号古墳は、第3号古墳北墳丘上に位置しており、東西に走る屋根の北側斜面に構築されている。

調査前の状況 調査前、当古墳は、竹藪造成に直接影響されていない為、比較的旧規をとどめており、径8m前後の封土状たかまりが認められ、また石が露出散乱して1基の古墳の存在を想像させた。

遺構 第3号古墳の墳上を整形盛土した石積二重基壇が存在することが判明した。この基壇は一辺の長さ



第2号古墳

東西2.75m、南北2.55m、内側東西1.85m、南北1.75mとはほぼ正方形に近い。各辺はそれぞれ東西南北に面しており、四隅には比較的大きい石を用いている。

基壇は現在外側1段、内側2段が残存し、高さ70cmをはかる。基壇内を精査したが土壇等の遺構は検出できなかった。

遺物 第2号墓から出土した遺物は、基壇石組の間から、灯明皿と考えられる埴輪土器の細片が多数出土している。

小結 第2号古墳は、古墳時代以降に古墳の一部を破壊して構築されたものと考えられ、その時期については室町時代以降と推定された。

第3号古墳の調査

位置 第3号古墳は、今回発掘調査の対象となった古墳中、もっとも高い位置にあり、北福には後世の基壇(第2号遺構)が構築されている。

墳丘 調査前、墳丘は東西径15m、南北径17m、高さ1.4mの不整形の円形墳と考えられた。墳頂部は削平されて、大小の被掘坑があり、石材が散乱して相当の破壊を受けていた。調査の結果、南墳丘面は土取りのため大きく破壊されているが、復元径20m、高さ5.

3mの円形墳と推定できる。なお墳丘上には葺石・埴輪等の存在は認められなかった。

石室 本古墳の内部主体である横穴式石室は、南に開口する両袖式の例にならうものである。石室の規模は、現存全長7.3m、玄室長4.1m、玄室幅5.1m、右袖幅1.45m、左袖幅2.1m、羨道幅1.25m、玄室高2mであるが、全長・高さとも後に破壊をうけ旧規をとどめていない。復元すれば全長10m、高さ4.5mと考えられる。

石室の平面形は、前述の如く、横に広いうえに羨道が狭く、そのため袖幅が大きくなっており、また羨道の主軸が玄室のそれと異なり、南々東にそれている等、非常に特異な形態を示している。また石材も、大きい石室にもかかわらず、逆に小目目の石を多用構築し、同一古墳群ながら第5号古墳と明らかな対比を示している。しかし袖部、側壁等の石の構築方法は同一のものであり、大差は認められない。

第3号古墳の天井石架構の技法は、いまだ断定できないが、他の類例から推察すれば、第6石目から大きい石を用い、四方から持ち送り、天井一石までドーム型に築造したものであろうと考えられる。

床面のレベルは、奥壁部が若干低く、羨道入口部が



第3号古墳



第3号古墳出土の壺と器台

高く、その差は2.5cmをはかる。石室入口部は小石で閉塞され、石室内と外界とを遮断する施設——羨道閉塞——が認められた。排水施設は認められなかった。

遺物 石室内は比較的保存状況が良好であったが、石材が床面に至るまで落ちこんでいたため、相当多数の遺物が破片となり飛散し出土している。

石室右奥壁部より坏身7点、坏蓋3点、蓋のある高坏2点、高坏1点、提瓶1点、台付壺1点、こしきの把手1点、台付有蓋壺1点、壺1点の須恵器類、また土師質の埴2点。

石室中央部の奥壁寄りから坏身2点、坏蓋4点（内、つまみのあるもの2点）。

石室左奥壁寄りから帯の留金具2点、帯の飾金具10数点、香葉数点、釘3点、鏡板数点

石室の中央部からは、つまみ付き坏蓋1点、右側壁寄りに高坏2点、つまみ付き蓋1点が出土、左側壁より用途不明鉄製品10数点。

羨道付近より、子持ち台付壺1点、壺1点、つまみ付き坏蓋3点、蓋付高坏1点、かまどとこしき、それにかまどの把手1点が出土した。

小結 本古墳は、横長の玄室を有する特異なものであると共に、副葬品として特に造られた装飾付きの土器等、今まで発見例の少ない遺物を出土している。

築造年代は、遺物等から6世紀中葉 550～560年代



第3号古墳出土のかまどセット

と考えられ、追葬期間は比較的短く、一世代25～30年間と考えられ、7世紀には下らないであろう。

第4号古墳の調査

位置 第4号古墳は、大通寺古墳群中の中位に位置し、西方にある第5号古墳と40m離れて存在している。

墳丘 調査前、墳丘は全く認められず、逆に1辺10～13mの被掘坑が穿たれていた。発掘調査の結果、被掘坑底部は地山層以下にまで及び、墳丘盛土は確認できず、わずかに裾部に盛土状の土が認められたが、流出土の可能性もあり断定できない。墳丘上には埴輪、葺石等の外部施設はなかったものと考えられた。

石室 本古墳の内部主体は、被掘坑内に散乱する巨石等で、第3号・第5号・第6号古墳等と同様、横穴式石室と考えられた。地山以下に及び削土の為、石室は全壊しており、現在、石組の一部らしきものも認められるが定かでない、石室の規模、構造を知ることにはできなかった。

遺物 散乱した石材間より、本古墳営造にかかる須恵器坏身片が出土し、他に須恵器、土師器片多数が出土しているが、旧位置をとどめるものは全く発見できなかった。

小結 本古墳の築造時期は、前記の須恵器より、6世紀末と考えられた。

第5号古墳の調査

位置 第5号古墳は、本古墳群中の中位に位置し、南西に第6号古墳、北に第3号古墳と隣接して築造されている。

墳丘 調査前、墳丘は竹藪造成のために全く平坦に削られ、墳丘らしきものは残存せず、わずかに石室主軸方向に幅5m、高さ2m程の小山状を呈する土塊が認められたのみであった。調査の結果、石室は全長11.5m、高さ2.8m、復元高3.8mを知ることができ、これより旧規を推定すれば、おそらく墳丘径20m、墳高5mを下らない円形墳と考えられる。墳丘には埴輪、葺石等の外部施設はなかったものと思われる。

石室 本古墳の内部主体である横穴式石室は、東南に開口し、両袖式の例にならうものである。石室規模は、現存全長11.5m、玄室長4.1m、玄室幅3.35m、右袖幅0.6m、左袖幅1.15m、羨道幅1.7m、玄室高2.8mをはかる。石室は、玄室の上部2段および天井石、羨道部の天井石を失うのみで、保存状況は良好であり、復元玄室高3.8mと推定できる。石室用材は、花崗岩を自然石のまま使用している。

玄室は、現在奥壁2段、側壁3段が残存しており、最も下段の石からわずかな持ち送りは認められるが、3段目より巨石を積み極端なドーム型に持ち送っている。そのようにして天井石は一石で架構されたものであろう。袖部は、左右ともに巨石を縦積みにし、一石で構築している。羨道部は、玄室に比べ小石を積上げており、玄室に近付くにつれ持ち送りの技法で構築している。

床面のレベルは、玄室内はほぼ同一であるが、羨道部は次第に下がり、その差は0.7mと大きい。これは急傾斜の地山の影響をうけたものであろう。玄室内および袖部付近に敷石が施され、約20cm大の小石が面を整えて床一面に敷かれている。特別大きい2枚の石は棺台としての機能を持っていたものと考えられる。

遺物 本古墳は、平安末期の土器が出土するように、早くから開口盗掘をうけ、大部分の遺物が羨道部より一括、かつ破片となり面を遊離して検出された。ようやく、側壁の影にあった埴輪が6点、ほぼ旧位置をとどめて完形で出土した。右袖部より杯蓋1点、羨道部より坏身2点、杯蓋3点が検出された。

他に、玄室内より、トンボ玉と呼ばれるガラス玉2点、埴土器片が、また羨道部より器台1点、壺2点、杯蓋・坏身各4点、祭祀用かまどの細片が出土している。

また、凝灰岩片が袖部付近より羨門にかけて多数出土しており、復元接合すれば組合せ式石棺1個体を示し、長さ1.83m、幅1.0m、高さ0.82m、内規長1.73m、幅71cm、高さ56cmのものと考えられる。

小結 本古墳は、正方形プラン・ドーム型持ち送りの石室、祭祀用のかまど等、津市北郊古墳の特色のすべてを持つ上に、石棺の出土をみている。津市近郊における石棺の出土は、隣りの百穴古墳群・第24号古墳を知るのみである。

本古墳の築造年代は、検出した遺物および石室の規模等より、6世紀後半570～580年代、追葬下限は、7世紀初頭620～630年と推定された。

(次号に続く)



第5号古墳